

今昔物語集

10

震旦部

池上陶

東洋文庫
383

平凡社

今昔物語集

10

震旦部

池上洵一 訳注

いけがみじゅんいち

池上 洵一

昭和12年岡山県生。神戸大学文学部卒（昭35）、

東京大学大学院人文科学研究科修了（昭41）。

現職 神戸大学文学部助教授。

専攻 日本文学（古代中世説話文学）。

主著 『今昔物語集一本朝部一』（共訳，平凡社「東洋文庫」），『三国伝記』（三弥井書店「中世の文学」）他。

今昔物語集10 巖旦部〔全2巻〕

東洋文庫 383

1980年8月20日 初版第1刷発行

定価 1,600円

訳注者 池上 洵一

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下中 邦彦

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

発行所 郵便番号102 東京都千代田区四番町4番地
振替・東京8-29639 株式会社 平凡社

© 株式会社 平凡社 1980 Printed in Japan 不良本は、直接小社サービス課で
お取替え致します(送料小社負担)

凡 例

一 本書は『今昔物語集』震旦部全五巻の口語訳を二冊に分けたうちの第二冊であり、巻九・十が収載されている。

一 本書の口語訳の原本には、岩波書店版・日本古典文学大系『今昔物語集』の本文を使用した。

一 口語訳は、原則として意訳を避け、できるだけ原文に忠実であることを心がけた。ただ直訳のままでは現代文として成り立たぬ場合、あるいは文意をつくさなかつたり、冗長にすぎたりする場合などには、たとえば句の順序をかえたり、主語・客語を補い、または省くなどして意訳したところがある。俗語的表現は、恣意に陥ることを恐れ、なるべくこれを避けた。

一 本文中□□により囲まれた空白部は、それに相当する部分が原本に欠脱していることを示す。〔 〕内の語句は、原本に欠脱している部分を、原本と同文的な類語、あるいは確実な理由によって推定できる場合に限り、それらによって補ったものである。これらの典拠や理由は、それぞれの話末に注記した。

一 偈や経文の類は、原則として本文中では原文のまま読み方を示すにとどめ、その大意を注として話末に示した。

一 平易な用語に訳しにくい語句や、原文に問題があつて文意がわかりにくい部分、原文に明らかな誤謬がある部分などについては、話末の注記により簡略な説明を加えた。

一 話末の注記に引用する文献は、原則として、その話の出典もしくは最も近い類話を有する文献に限定した。

一 各話の題名は、なるべく原文の読みくだしに近く口語訳するように努めた。

一 本書の製作にあたっては、国東文麿氏の明治書院版・校注古典叢書『今昔物語集』をはじめ、諸先学の研究に教えられるところが多かったが、なかでも山田孝雄・同忠雄・同英雄・同俊雄四氏校注の日本古典文学大系『今昔物語集』は、口語訳の原本としたばかりでなく、多方面にわたって絶大な恩恵をこうむった。特に記して深甚の謝意を表したい。

目 次

凡 例

卷第九 震旦・孝養

- 震旦しんだんの郭巨かつきよ、老母に孝を尽して黄金の釜を得る語 第一
- 震旦しんだんの孟宗もうそう、老母に孝を尽して冬に筍たけのこを得る語 第二
- 震旦しんだんの丁蘭ていらん、木の母を造って孝行する語 第三
- 魯州ろしゅうの人、隣人を殺して罪を免れる語 第四
- 会稽州かいけいしゅうの楊威ようい、山に入つて虎の難を逃のがれる語 第五
- 震旦しんだんの張敷ちやうふ、亡母の扇を見て母を恋い悲しむ語 第六
- 会稽州かいけいしゅうの曹娥そうが、江えに沈んで死んだ父を恋い、自分も江に身投げする語 第七
- 欧尚おうしやう、亡父を恋い、墓に庵いおりを造って住む語 第八
- 震旦しんだんの禽堅きんけん、異境から父を迎えて孝行する語 第九
- 震旦しんだんの顔烏がんう、自ら父の墓を築く語 第十

震旦の韓伯瑜、母の杖を受けて泣き悲しむ語 第十一

朱百年、母を思つて寒夜に衾を脱ぐ語 第十二

□人、父の錢で買ひ取つた亀を河に放す語 第十三

震旦の江都の孫宝、冥途で母を救つて蘇る語 第十四

河南の元大宝、死んで報いを張叡冊の夢に告げる語 第十五

索胃、死んで沈裕の夢に官を得る時期を告げる語 第十六

震旦の隋代の人、母の生まれ變つた馬を得て泣き悲しむ語 第十七

震旦の韋慶植、娘の生まれ變つた羊を殺して泣き悲しむ語 第十八

震旦の長安の人の娘、死んで羊となつて客に告げる語 第十九

震旦の周代の臣伊尹の子伯奇、死んで鳥となつて継母に怨みを報いる語 第二十

震旦の代州の人、狩獵を好んで娘を失う語 第二十一

震旦の兗州の都督遂安公、死んだ犬の責めを免れる語 第二十二

京兆の潘果、羊の舌を抜いて現報を受ける語 第二十三

震旦の冀州の人の子、鶏の卵を食べて現報を受ける語 第二十四

震旦の隋の代に、天水の姜略、鷹を好んで現報を受ける語 第二十五

震旦の隋の代に、李寛、殺生によって現報を受ける語 第二十六

震旦の周の武帝、鶏の卵を食べたために冥途に行つて苦を受ける語	第二十七	九
震旦の遂州の総管孔恪、懺悔を修する語	第二十八	一〇
震旦の京兆の殷安仁、冥途の使いに免される語	第二十九	一〇
震旦の魏郡の馬嘉運、冥途に行つて蘇る語	第三十	一一
震旦の柳智感、冥途に行つて歸つて来る語	第三十一	一二
侍御史遜廻璞、冥途の使いの錯誤のため、途中から歸る語	第三十二	一三
震旦の太史令傅奕、冥途に行く語	第三十三	一四
震旦の刑部侍郎宗行質、冥途に行く語	第三十四	一五
震旦の庾抱、曾氏に殺されて怨みを報いる語	第三十五	一六
震旦の睦仁蒨、冥道の事を知ろうと願う語	第三十六	一七
震旦の周善通、戒を破つたために現世で財を失い、ついに貧賤を得る語	第三十七	一八
後魏の司徒、三宝を信じず、現報を得てついに死ぬ語	第三十八	一九
震旦の十士瑜の父、工賃を支払わず、牛となる語	第三十九	二〇
震旦の梁の元帝、誤つて珠を呑み、片目が斜視になる語	第四十	二一
隋の大業の代、獄吏の悪行により、その子がおかしな身体に生まれて死ぬ語	第四十一	二二
河南の人の妻、姑に蚯蚓の糞を食べさせたために現報を得る語	第四十二	二三

卷第十 震旦・国史

晋の献公の王子申生、継母驪姫の讒によつて自殺する語 第四十三 一四六
 震旦の莫耶、剣を造つて王に献じ、子の眉間尺を殺される語 第四十四 一四九
 震旦の原谷、父を謀つて不孝を止めさせる語 第四十五 一五〇
 三人、樹下に来会して、その中の老いた者に孝行する語 第四十六 一五一

秦の始皇、咸陽宮で世を治める語 第一 一五九

漢の高祖、まだ帝王でなかつた時の語 第二 一六〇

高祖、項羽を討つて漢の代の最初の帝王となる語 第三 一七〇

漢の武帝、張騫に天の河の水上を調べさせる語 第四 一七二

漢の元帝の后王昭君、胡国に行く語 第五 一八一

唐の玄宗の后上陽人、空しく老いる語 第六 一八四

唐の玄宗の后楊貴妃、帝の寵愛を受けたために殺される語 第七 一八六

震旦の呉招孝、流詩を見てその作者を恋する語 第八 一九四

臣下孔子、道を行き、童子の問いを受けて答える語 第九 一九七

孔子、逍遙し、榮啓期に会って尋ねる語 第十

莊子、□に粟を乞う語 第十一

莊子、人の家に行くに、主雁を殺して肴とする語 第十二

莊子、畜類の所行を見て走って逃げる語 第十三

費長房、夢に仙法を習い、蓬萊に行つて帰つて来る語 第十四

孔子、盜跖に教えるためにその家に行き、怖じて帰る語 第十五

養由、天に十日が現われた時、九日を射落とす語 第十六

李広の矢、虎に似た岩に立つ語 第十七

霍大將軍、死んだ妻に会い、打たれて死ぬ語 第十八

不信蘇規、鏡を破つて妻に与えて遠くに行く語 第十九

直心季札、劍を猪君の墓に懸ける語 第二十

長安の女、夫に代わつて枕を替えて敵に殺される語 第二十一

宿駅に泊った人、遺言に従つて金を死人に添えて納め、徳を得る語 第二十二

病が人の姿となり、医師がその言葉を聞いて病を治す語 第二十三

震旦の賈誼、死後墓で子に学問を教える語 第二十四

高鳳、竿州の刺史に任じられ、旧妻を迎える語 第二十五

文君、箏に興じて相如に会い、夫婦となる語 第二十六

震旦の三人の兄弟、家を売って荊の枯れるのを見、代金を返して再びその家に住む

語 第二十七

震旦の国王、江に行つて魚を釣り、大魚を見て恐れて帰る語 第二十八

震旦の国王、愚かにも玉造りの手を斬る語 第二十九

漢の武帝、蘇武を胡塞に遣わす語 第三十

二国、互いに合戦を挑む語 第三十一

震旦の盗人、国王の倉に入つて財宝を盗み、父を殺す語 第三十二

生贄を立てていた国の王、これを止めて国を平らかにする語 第三十三

聖人、后を犯して国王の咎めを蒙り、天狗となる語 第三十四

国王、百丈の石の卒都婆を造り、石工を殺そうとする語 第三十五

老婆、毎日卒都婆に血が付くか調べる語 第三十六

長安の市で粥を汲んで人に施す老婆の語 第三十七

海中で二龍が戦い、獵師が一龍を射殺して玉を得る語 第三十八

燕丹、馬に角を生えさせる語 第三十九

利徳と明徳、酒に興じて常に行き会ふ語 第四十

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

今こん
昔じやく
物もの
語がたり
集しゆう
10

震しん
旦だん
部ぶ

池いけ
上がみ
洵じゆん
一いち
訳注

卷第九

震旦・孝養

震旦しんだんの郭巨かつきよ、老母に孝を尽して黄金の釜を得る語 第一

今は昔、震旦の□[㊦]の代に、河内[㊧]というところに郭巨[㊨]という人がいた。父は亡くなり母と暮らしていた。

郭巨は母に孝行を尽したが、貧乏だったのでいつも食物に困窮していた。ようやく得られた食物は三つに分け、母と自分と妻と三分の一ずつに分けて食べていたのである。このようにして永い間老母を養っているうち、妻が一人の男の子を産んだ。その子が次第に成長して六、七歳になると、いままで三つに分けていた食物を四つに分けるようになった。だから母の食物はいよいよ少なくなつた。郭巨は歎き悲しんで妻に語つた。

「永い間食物を三つに分けて母を養ってきたが、それでも少ししかなかったのに、あの子が生まれてからは四つに分けるようになったので、ますます少なくなつてしまった。私は

母にできるだけ孝行したい。それで、老いた母を養ってあげるために、あの子を穴に埋めて亡きものにしてしまおうと思う。これは普通にはできないようなことだけれども、ひとえに親孝行のためなのだ。お前もあの子を惜しんだり悲しんだりしないでくれ」

妻はこれを聞いて、涙を雨のように流しながら答えた。

「人が誰でもわが子をかわいく思うことは、仏様もその深いお慈悲の心を『一子の慈悲』と譬えて説いていらっしゃる通りです。私ももう若くはなくなつて、たまたま一人の男の子を得たのです。懐ふところから離すのでさえ悲しくてなりませんのに、まして遠い山に連れて行って埋めて帰るなんて、その気持は譬えようありません。でも、あなたが深い深い孝心からお考えになったことを私が妨げたなら、天の神様の責めを逃れるすべはありますまい。だから、なにかもあなたのお心にお任せします」

郭巨も妻の言葉に涙を流して感動した。

さて、妻に子を抱かせ、自分は鋤すもを持つて遙かな深山に行き、いよいよ子を埋めるために、泣く泣く穴を掘り始めた。すると、三尺ほど掘った時、穴の底で鋤の先に何か固い物が当たった。石かと思ひ、掘りのけようと思つて、むりやりに深く掘り込んだ。なおも強引に掘り進んで見ると、石ではなく、一斗入りほどの黄金この釜で、蓋がついていた。その蓋を開けて見ると、釜に文字が記してあり、

「黄金の釜一個、天が孝子郭巨に賜うものである」

とあった。郭巨はこれを見て、わが孝心の深さに天が感じて与えて下さったのだと喜び感動し、妻は子を抱き、彼はその釜を背負って家に帰った。

その後、この釜を少しずつ破っては売って、老母を養いながら暮らすと、何一つ不自由はなく、すっかり富貴の人となっていました。その時、このことを聞いた皇帝が不思議に思つて、郭巨を召してお尋ねになったので、郭巨はこれまでのことをお話しした。皇帝が驚いて釜の蓋を召してご覧になると、たしかにその文句がはつきりと記してあった。

皇帝はこれをご覧になって感動し、貴くお思ひになつて、郭巨をたちまち国の重臣に取り立てられた。世の人もこれを聞いて、彼の孝行を貴いことだと誉めたたえた、と語り伝えているとのことである。

一 □の代 船橋家本『孝子伝』も時代を明記しない。『蒙求』は「後漢」とする。

二 河内 漢代の河内郡は河南省武陟県付近。黄河の北側の地。

三 郭巨 『注好選集』には「字文举、後漢河内人也」とある。

四 一子の慈悲 原本「人ノ子ヲ思フ事ハ、仏モ一子ノ慈悲トコソ説キ給ヘレ」。自分の一人子をつくしみあわれむような心。仏は一切衆生を平等にあわれむこと、わが一子に対するのと同様で

あるといわれ、本書卷三第二十七話にも「仏ハ（略）一切衆生ノ為ニ平等一子ノ悲ヲ垂レ給フ也」と説かれている。

五 黄金の釜 原本「一斗納許ナル黄金ノ釜有り、蓋有り」。蓋がついていたことは、どの類話にも見えない。船橋家本『孝子伝』には「金一釜」、『蒙求』や『注好選集』には「黄金一釜」とあるが、この「釜」は本来は量器（ます）の名で、六斗四升入りの量器のこと。『法苑珠林』には「一釜黄金」とあるように、その量器一杯分の黄金が出てきたというのが原義である。一斗入りで蓋があったとする本話は、これを黄金製の釜（かま）と誤解しているが、この誤解は御伽草子『二十四孝』など後代の作品ではむしろ一般的なものとなった。

震旦の孟宗、老母に孝を尽して冬に筍を得る語 第二

今は昔、震旦の□の代に、江都に孟宗という人がいた。父は亡くなり母と暮らしていた。孟宗は孝心が深く、老いた母に孝行の限りを尽した。母は筍が好きで、筍なしでは食事もできないほどだったので、孟宗は永年の間、なんとしても筍を求めてきて、朝晩の食膳に欠かさず筍を供えつづけていた。筍が盛んに出る季節には求めることもたやすかったが、筍の出ない季節には東西に奔走してようやく見つけて掘り出すのだった。